

講座「ヤマトタケル伝承を読み解く」

藤原 道夫

昨年 11～12 月にかけてタイトルの講座が三鷹市関連の施設で開かれ、90 分授業に 3 回出席した。ヤマトタケルについては小学校で習い、「くさなぎのつるぎ」の名だけははっきり覚えている。そのつるぎについて聴けるのではないかと期待した。

まずは出自のこと。『古事記』や『日本書紀』が引用され、読みにくさと長い名前が沢山出てくるのにうんざり。要は景行天皇（第 12 代、100 年頃）と「いなびのおおいつらめ」との間に生まれた双子の弟で、兄は「おおうすのみこと」、自身は「おうすのみこと」と名付けられた。産湯を使ったとされる 2 つの石臼が日岡神社（兵庫県加古川市）に残っている。臼という言葉は興味深い。民話「花咲じいさん」や「さるかに合戦」で臼が力を発揮する。

弟は長じて兄を暴力により殺してしまう。恐れをなした天皇はみことに熊襲征伐を命じる。クマソタケルのもとに赴くと、屋敷は三重に守られ、中で宴が催されていた。そこでみことは女装してうまく宴の中に入り込む。何故女装したかについては、正反対の性質を内包することで人間を超越した存在となり、戦時に必要とされる非日常的な力を獲得する、という説もあるとか。ともかく主を隠し持った短剣で撃ち取ってしまう。クマソタケルは息絶え絶えにみことにヤマトタケルの名を与える。ただし、これは象徴的な名称で多くの豪族を一人の人格として統合したものだという。古代神話はこの辺りが分かりにくい。

ヤマトタケルは東国からの帰途伊吹山に達し、大きな白い猪と化した神と戦うことになる。格闘して深手を負ったタケルは麓の泉のある所に落ち延びる。故郷の大和に戻ることはもはや叶わないと観念し、思国（くにしのび）歌「倭は国のまほろば たたなづく青垣 山隠れる倭しうるわし・・・」を詠んで終に事切れ、白鳥となって飛び去った。

伊吹山山頂に大きなヤマトタケル像が立っていると初めて聞いた。この山には 2 度登ったが、イブキトリカブトなどの高山植物探しに夢中になり、像に気付かなかった。

講座に出席して驚いたのは、難しそうな質問がいろいろ出たこと。神話おたくが結構いそうだ。ヤマトタケルがどうしてカタカナで表記されるのか、などと問う雰囲気ではない。それに肝心の「くさなぎのつるぎ」のことは省かれていた。またの機会のお楽しみか。

